

たのしくあそぶ まちづくりを応援する情報誌「たむたむ」

# tam tam

2026.1  
VOL. 38



今、必要とされる  
「多様な居場所」

## 特集

今、居場所が必要なワケ

## 事例紹介

丹波市地域つながりセンター ここから  
まねき食堂

## インタビュー

駄菓子のまえだ

## 今、居場所が必要なワケ

昨今、「居場所」という言葉を耳にする機会が増えました。居場所と聞くと、どんな場所を思い浮かべますか。ふらっと立ち寄れるカフェ？それとも、趣味を楽しむ教室でしょうか。

昔はたくさんあった駄菓子屋さん。”どんどこん焼き”や”モロッコヨーグル”と言った懐かしいお菓子を手に、放課後の時間を過ごした記憶がある方も多かもしれません。そこには自然と人が集まり、皆がつながる居場所でした。

現代の日本…丹波市を見ても、核家族が増えたり、自治会の行事が少なくなったりと、これまで当たり前であった人と人との「コミュニケーション」が希薄になってきています。気づかないうちに、孤独や孤立を感じてしまう社会になっているとも言えるのではないのでしょうか。

だからこそ、居場所という視点が改めて注目されています。本号では、丹波市内の居場所づくりの実践から、生きやすく・暮らしやすい地域について考えます。



## 調査から考える孤独・孤立の課題

内閣府が実施した

「孤独・孤立対策に関する世論調査」において、孤独や孤立の問題を身近に感じると回答した人が約半数いることがわかりました。この結果は、

孤独や孤立が特別な人の問題ではなく、多くの人の日常の延長線上にある課題であること示しています。また、この調査において、約半分の人が「孤独を抱えたとき、誰かに相談することは良いことだ」と回答しています。

孤独・孤立の課題は多岐にわたります。令和6年2月に行われた、丹波市が行ったヒアリングの結果において、「二人親家庭」「生活困窮」などで、不安を抱えながら暮らす人が多くいることが示さ



▲(図2) 出典：丹波市子ども計画策定に係る関係団体ヒアリング 結果報告書

## 1 孤独・孤立の意識について

## (1) 孤独・孤立の身近さ

問1. 「孤独」や「孤立」について、あなたにとって身近に感じますか。(〇は1つ)

| 該当者数  | 身近に感じる<br>(小計) | 身近に感じる<br>% | どちらかという<br>と身近に感じる<br>% | どちらかという<br>と身近に感じない<br>(小計) | 身近に感じない<br>% | 無回答  | 無回答<br>% |
|-------|----------------|-------------|-------------------------|-----------------------------|--------------|------|----------|
| 人     |                | %           | %                       |                             | %            |      | %        |
| 1,604 | 48.4           | 16.7        | 31.7                    | 49.6                        | 30.9         | 18.8 | 2.0      |

▲(図1) 出典：内閣府「孤独・孤立の実態把握に関する世論調査(速報)」(令和7年実施)

れていました。貧困により食事が満足にとれなかったり、親が不在となる時間が長くなりさみしい気持ちや不安な想いを抱えている子どもがいたり…子どもにとって身近な家庭が、ほっとできる場所でなくなっている人が多くいる現状を表しています。

大人であっても、仕事や人間関係、家庭の事情、体調の変化など、様々な理由で立ち止まることは誰にでもあります。不安な気持ちになったとき、悩みを聞いてもらえたり、誰かとたわいもない話をしたり、集まって笑って気持ちを癒したりすることを望む人が多いのではないのでしょうか。誰かと話せる場や、「ここにいてもいい」と思える場があるかどうかは、心の状態に大きく影響します。

2つの調査結果から、そうした支えとなる関係や場所が不足していると感じる人が、多いと考えられます。日常的につながれる関係性や、用事がなくても足を運べるような場所の存在が、孤独・孤立の予防となるかもしれません。

## 多様な価値観でつくる、多様な居場所

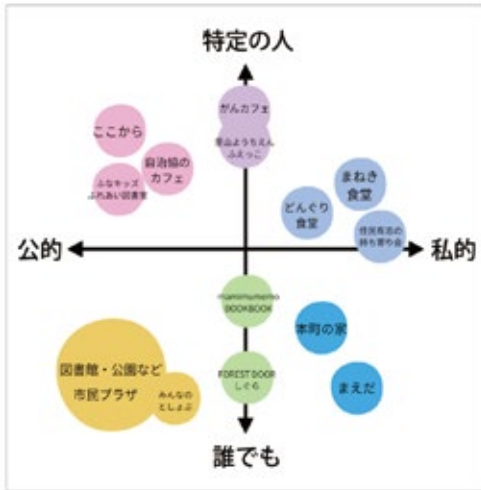
地域には様々な「居場所」があります。図3は、居場所の性質を公的か私的か、特定の人を対象とするかそうではないかという視点で、当センターが独自で整理したものです。(過去3年間のt a m t a mにて紹介した団体を一例としてあげています)

それぞれの性質には一長一短があります。公的な居場所は予算立てがされており一定の公平な支援が約束されています。ただし私的な居場所ほどの数や自由度はありません。私的な居場所であれば思い立った人が



思い立った場所、対象者、内容で実施することが可能です。また、特定の対象に向けた居場所は、対象に特化し支援が充実しているものの対象者以外は行きにくく、誰でも利用できる居場所は、自由に参加できる反面、利用者が限定されず安心感や深い交流が生まれにくい場合があります。「心理的に安心して、自分らしくいられる状態」の感覚は、属性や世代、居場所を利用している人が抱えている課題や不安、想いや価値観によって異なります。すでに利用している人であっても現状の居場所が、その人のニーズを100%叶えているとは限りません。

図3を見ると、市内では、それぞれに居場所があり、どの部分も埋まっているように見えます。しかし、それぞれの居場所の間が空いているとも言えます。状況や価値観が多様化する社会において、隙間に入って居場所が見当たらない人も増えています。その隙間に目を向けられるのは、多様な価値観を持った住民一人ひとりの気づきや思いやりかもしれません。



▲(図3) 居場所を整理した図  
(丹波市市民活動支援センター作成)

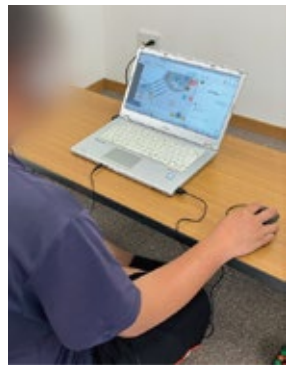
## 事例紹介

### 特定の属性やニーズに向けた公的な居場所

#### 『丹波市地域つながりセンター「ここから」』

『丹波市地域つながりセンター「ここから」』は、生きづらさを抱える方や、その家族をサポートしている公的な居場所です。勉強や仕事、人間関係など様々な悩みを抱える利用者のみなさんからは「同じ悩みを抱える人となることができて励みになる」「専門家に悩みを聞いてもらえるのは安心」「ゆるやかな空間で、ただぼーっとしていても何も言われないのが嬉しい」「みんなでゲームするのが楽しい」などの声が聞かれています。

利用者が自身の課題や周りの環境と向き合っているように、心理士によるカウンセリング体制も整っています。支援主任の有田美希子さんは「ここに来る人が、ここでのように過ごしたいかをそのまま受け止め、安心して過ごせるよう寄り添いたいと思っています。スタッフも安定して関われるようにチームを組み合わせ、本人、家族、地域のつながりを大切にしながら、ほっとできる場所“づくり”を目指しています」と想いを語ります。



▶時代にあった取り組みとして、メタバースを活用

行政や地域の関係者と連携しやすい公的な居場所は、人が出会い、情報が集まり、地域とのつながりが生まれる場となっています。

### 身近に寄り添う私的な居場所『まねき食堂』

青垣地域在住の橋本千英さんは、児童養護施設に勤務する傍ら、個人の活動として移動型駄菓子屋や自然遊び活動など、子どもの居場所づくりに取り組んできました。仕事も含めて、ひとり親や家庭内の問題、生活困窮などの課題を抱える当事者には、相談できる身近な人が必要と感じていました。その手助けになればと、2023年12月に始めた活動が地域食堂『まねき食堂』です。橋本さんが準備した食材で、毎回カレーライスを提供しています。

まねき食堂は、佐治地域にある佐治スタジオというスペースで定期的に開催、近隣に住む子どもや大人、地域に住んでない人も集います。橋本さんは、居場所をつくる上で当事者以外の誰でも利用できることを大切にしていると言います。当事者以外の利用があることで、当事者が相談相手を見つかったり、利用しやすくなると考えているからです。「大人と高校生、高校生と子どもなど、普段接点のない人たちのつながりができてきたと感じています。まずは、社会福祉協議会や子育て学習センターなどの利用をきっかけに、まねき食堂を知ってほしいです」と橋本さんは話します。私的な居場所としてネットワークの軽さと地域性を活かし、相手の顔が分かる小さなつながりで孤独・孤立を防ぐため、活動しています。



## 誰でも自由に利用できる気軽な居場所

## 駄菓子子のまえた(春日地域)

## 店主 細見佳代さん

春日地域にある小さな駄菓子屋さん『駄菓子子のまえた』。お店には駄菓子というアイテムを通じて老若男女問わず沢山の人が訪れ、『駄菓子子のまえた』は地域の居場所となつています。駄菓子は安くて買いやすいのが特長です。そこで細見さんはいつも温かい笑顔で、皆を迎えます。

小さな子どもは、おこづかいの範囲で駄菓子をを選び、自分で計算したものをレジに持ってきてます。細見さんはその子どもと一緒に答え合わせをして「合ってたね、すごいね」と褒めながらコミュニケーションを取ります。特別支援学校や小学校の授業「お買い物体験」にも、まえたが利用されています。

部活帰りに仲間とおしゃべりをしながらお店のベンチで小腹を満たしている高校生、学校で遊ぶ約束してお店に来た小学生、みな楽しそうに細見さんとおしゃべりしています。夜遅く帰宅するお母さんを待つ間、一人で家にいるのはさみしいだろうと、細見さんが気にかけている子どもには、広告の紙のお菓子袋を作るお手伝いを準備して待っています。

お隣のおばあちゃんは、毎日細見さんにコー

ヒーの差し入れをしてくれます。「色々な人とおしゃべりが、互いの元気の源となり、安否の確認にもなっている」と細見さん。



5年前、前の店主が病で倒れ、細見さんは当時働いていた会社を退職し、『駄菓子子のまえた』を継ぎました。お店を引き継がずに、お店を閉めようと思わなかったのかと尋ねると「もちろん、考えなかった訳ではないです。ただこの辺り、高校から電車までの道のりにお店がないし、電車も1時間に1本しかないでしょう?それが気になって。あと、昔から地域の子供会の行事などでお菓子を頼まれたり、遠足や社会見学の際に子どもたちが買いに来てくれたりしていて、ここを閉めると子どもの楽しみを奪うような気がしちゃって。この店を続けようと思った一番の

理由は、子どもの笑顔をずっと見ていたかったからかな」と穏やかに答えます。

駄菓子を選ぶ、買う、食べる、誰かとおしゃべりする。まえたは、それぞれの過ごし方で、いろんな年代の人が立ち寄れる居場所となっており、その場所で細見さんはみんなに「お金よりも大切なもの」を教えようとしている気がします。

## 居場所づくりのヒント

地域に多様な「安心して立ち寄れる場所」があること、その場所が担う役割の大きさや数、地域の安心・安全に直結します。人の価値観が多様化しているということは、その分、少しずつ違った特徴を持つ居場所が求められていることになります。その求めに応えるための、誰一人取り残さない居場所づくりのヒントとなるのは、単に場所を増やすことではなく、身近な一人ひとりの生活や心に寄り添い考えることです。そうして得た気づきが、社会の隙間に入って居場所がないと感じている人にも心地がいいと感じる居場所づくり、地域づくりにつながっていくのではないのでしょうか。様々な価値観、気づきから始まる誰かのためのほっとした居場所がきつと、地域福祉を支える力になります。

あなたは丹波市に、どんな居場所が必要だと思いますか?

